

宋代(960-1276)における地方武装勢力の展開

陸徐晨

文学研究科 哲学歴史学専攻 東洋史学専修博士後期課程3年

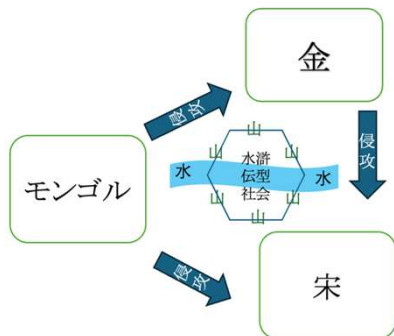
1、研究背景

宋代の地方武装勢力は、従来、盗賊・自衛義軍・民衆反乱などの個別事例として、主として政治史・軍事史の立場から研究されてきた。

戦乱によって生じた流民・逃亡者などを吸収して形成されたこれらの勢力は、一時的な武装集団ではなく、**血縁・地縁などには依存しない人的結合**を基礎として、一定の地域を支配し、**独自の軍事力・経済的秩序**で維持されてきた。

本研究では、歴史地理学の視点を加え、こうした宋代の地方武装勢力を、任侠的結合と「無縁」のネットワークを基礎とする「**水滸伝型社会**」という新しい社会モデルとして捉え、その形成と展開を明らかにする。

図1 宋代の「水滸伝型社会」のイメージ図



2、研究内容

宋・金(1115-1234)、さらに宋・モンゴル(1206-1368)の政権が南北で対峙し、戦争によって支配領域が絶えず変動するなか、いずれの政権による直接的支配も十分に浸透しにくい境界地域が生じた。地方武装勢力は、こうした政治権力の交錯する空間において、山林・沼沢・海島などを拠点とし、水陸交通と結びつきながら独自の「**水滸伝型社会**」を形成した(左図1)。

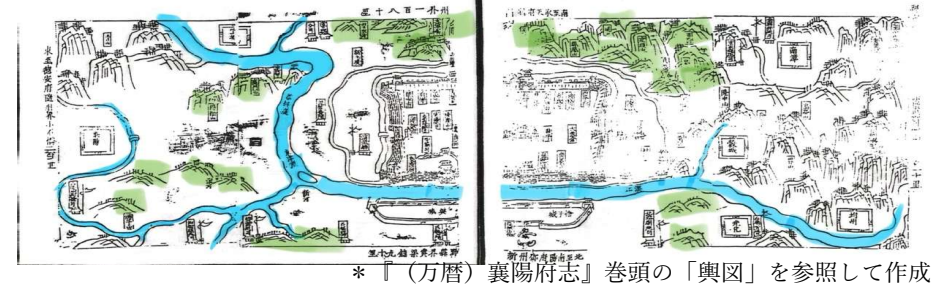
本研究では、宋代に活動した地方武装勢力のうち、**翟興・桑仲・李全**の三勢力を取り上げ、その形成過程・人的結合・活動空間・経済基盤および朝廷との関係を比較検討する。

血縁・地縁を超えた人的ネットワークを基礎とし、自律した軍事・経済・地域支配の機能を備えた「**水滸伝型社会**」の形成と展開を明らかにすることを目的とする。

例…図3 李全勢力物流図



例：図2 桑仲勢力の拠点図



3、研究成果

(ケース1) 翟興勢力-伊陽山寨を中心とする屯田・自給型の勢力運営*1

伊水周辺の伊陽山寨(現在の河南省)を拠点として活動し、宋代皇帝の陵寢保護を担うことで南宋朝廷から経済的支援を受け取り、屯田による軍糧の確保を通じて自立的な勢力運営を行った。

(ケース2) 桑仲勢力-襄陽・漢水流域を基盤とする水運型の地域支配 *2

襄陽府(現在の湖北省)を拠点として漢水流域に勢力を拡大した。当初は在地豪族からの供給に依存していたが、次第に漢水の水上交通、商税などを利用し、軍事集団を維持するための持続的な経済基盤を形成した。

(ケース3) 李全勢力-交通・物流と地方資源を利用する広域的な勢力運営*3

南宋朝に帰属した後も国家からの銭糧だけに依存せず、淮水と海を利用した交通・物流ネットワーク、商税、塩場などの地方資源を掌握することで独自の経済基盤を形成した。これによって、南宋の制度に組み込まれながらも高い自立性を維持した。

*1 本研究成果は、九州史学会(2024年12月15日)で報告し、論文として学会誌に投稿・審査中

*2 本研究成果は、宋代史研究会夏合宿(東京大会)(2025年9月1日-2日)で報告し、論文として学会誌に投稿・審査中

*3 本研究成果は、第74回 東北中国学会大会(2026年5月31日)、第5回 華夏大学・大阪公立大学 学術交流会(2026年6月14日)で報告した

4、今後の課題

宋代以降の地方武装勢力との比較を通じて、「**水滸伝型社会**」が形成期から変容期へといかなる展開を遂げたのかを明らかにする。